

建築家・遠藤新の設計による家具デザインの系譜

井上 祐一

はじめに

遠藤新設計の家具は大正期に造り付けと可動家具の併用で始まった。本稿は、可動家具の脚物について考察する。目的／遠藤の家具デザインについて、制作背景、製作方法の変遷及び社会背景との関連を明らかにする。方法／実測図および文献より抽出した資料を分類し、さらに設計方法・製作方法等により細分する。分類・細分した家具を年代順に表示、制作背景、社会背景との関連性を提示する。資料／実測図、雑誌『新建築』等を用いた。

家具の分類について

本稿は脚物を資料とし、一. 小椅子、二. 肘掛椅子、三. ソファ、および四. テーブルに分類した。さらに細分して、一. 一(一)二枚板背型、(二)縦格子背型、(三)幕板貫型／二. 一(一)縦格子背型、(二)六角形背型／三. 一(一)背・肘掛型、(二)胴丸型、(三)角肘付型／四. 一(一)二枚甲板型、(二)片持ち梁型、(三)側板格子仕切型、(四)幕板台座型の12項目とした。

家具デザイン分類表について

分類・細分に従い「家具デザイン年表」を作成。資料から抽出した1922年～1936年の家具について、一. 小椅子は一(一)二枚板背型(1923-1935)、(二)縦格子背型(1924-1926)、(三)幕板貫型(1928-1934)、二. 肘掛椅子は一(一)縦格子背型(1924-1925)、(二)六角形背型(1922-1927)、三. ソファは一(一)背・肘掛型(1928)、(二)胴丸型(1930-1934)、(三)角肘付型(1930-1936)、四. テーブルは一(一)二枚甲板型(1923)、(二)片持ち梁型(1924-1928)、(三)側板格子仕切型(1924-1926)、(四)幕板台座型(1928-1935)、全45件を年代順に表記した。

各分類と変容

一. 小椅子／一(一)二枚板背型：⊖1923(震災前)自由学園 ⊖1923(震災後)東洋軒/バラック建築 ⊖1924上代淑邸/卒業生らの寄付。以上ローコストデザイン。Ⓞ1935中銀倶楽部/社交場。
(二)縦格子背型：⊖1924山邑別邸/高級感あるデザイン。⊖1924萩原庫吉邸/震災後ローコスト化。⊖1926阿久津病院住居/萩原庫吉邸同等の特徴。(三)幕板式貫型：⊖1928加地別邸/貫にさらなる強度。⊖1930甲子園ホテル/脚先端のR加工。⊖1933白井恭二邸/甲子園ホテルと同様デザイン。Ⓞ1934中銀理事邸/木部は塗装仕上げのハイコストデザイン。
二. 肘掛椅子／一(一)縦格子背型：⊖1924山邑別邸/細かな装飾が多々。⊖1924萩原庫吉邸/彫刻装飾はわずか。⊖1925羽仁吉一郎/肘掛は不当辺六角形。(二)六角形背型：⊖1922犬養木堂邸/行燈デザイン同様の亀甲形の背を特徴。⊖1924上代淑邸/六角形の背及び矩形の肘掛が特

徴。㉓1925 青年会館/六角形の背、矩形の肘掛が特徴。上代邸が原型。㉔1925 山田秀男邸/貴なく青年会館と同デザイン。㉕1927 出口松尾邸/㉓㉔の変容形。

三. ソファー/(-)背・肘掛型：㉑1928 加地別邸居間/背部と肘掛部別部材としてデザイン。典型的なソファー形状㉑1928 加地別邸撞球室/背面と側面板張り。胴丸型へ影響。(二)胴丸型：㉑1930 甲子園ホテル/肘掛が背面をU字形（木製鏡板）デザイン。㉑1931 山本節次郎邸/甲子園ホテルと同様のデザイン。㉑1932 今泉邸/山本節次郎邸と同様のデザイン。㉒1934 中銀副総裁邸/デザインは上記3件と同様。木部塗装、鏡板クロス張り。(三)角脇付型：㉑1930 甲子園ホテル/肘掛木部先端片持ち。㉑1934 中銀課長邸/㉑甲子園ホテルを基本形に設計。㉑1935 中銀倶楽部/肘掛前面木部が2段の小・大曲面で構成。㉒1936 家庭購買組合/前面木部の上から大・小2段の曲面。

四. テーブル/(-)二枚甲板型：㉑1923 自由学園/幅狭の2枚の板を込栓で接続。ローコスト化。(二)片持ち梁型：㉑1924 山邑別邸/片持ち梁材が甲板を支える構造。㉑1924 上代淑邸大㉑1924 上代淑邸小/㉑山邑別邸と類似も彫刻加工無し。ステイン系塗装、片面フラッシュの甲板裏面無塗装。ローコスト化痕跡。㉒1925 羽仁吉一邸/山邑別邸を基本。甲板は片面フラッシュ。㉓1928 加地別邸/重厚感あるデザイン。(三)側板格子仕切型：㉑1924 山邑別邸/ディテールが高級感表現。㉑1924 萩原庫吉邸/山邑別邸と類似。微細なディテールなし。㉑1926 阿久津病院住居/萩原邸テーブルと類似。(四)幕板台座型：㉑1928 加地別邸/「幕板台座」の原型。㉑1930 甲子園ホテル/脚部先端R加工。㉑1933 今泉邸/甲子園ホテルと類似デザイン。㉒1933 白井恭二邸小/脚先端Rデザインに特徴。㉓1933 白井恭二邸大/幕板台座から突出の片持ち甲板。㉔1934 中銀副総裁邸/塗装されたハイコスト。㉕1935 中銀倶楽部/簡潔なデザイン。面取りなどにきめ細かさ。

まとめ

年表から、細分した型ごとに始終の年代が特定できた。大正期（1922-1926）は犬養木堂邸、自由学園および山邑別邸の家具を基本としたデザイン展開が確認できた。移行期（1927-1929）の加地別邸では以後展開された小椅子・ソファ・テーブルの原型が登場し、昭和期（1930-1936）に甲子園ホテルでの展開を機に型に変容形が現れた。遠藤の家具は、制作背景（条件）による製作方法、あるいは社会背景との関わりによりデザイン手法が総合されて生み出されたと考えられた。また、型ごとにデザインの標準化、即ち規格化が試みられたと考えられる。甲子園ホテルのガラスランプシェードが規格化・工業化の好事例である（『生活文化史』No. 77 拙稿）。なお、建具・石組み等のデザインの標準化については別稿に譲る。